
あめで5のお題

さなぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あめで5のお題

【Nコード】

N2607I

【作者名】

さなぎ

【あらすじ】

（お題小説です）

消息不明だった姉が突然婚約者を連れて帰ってきた！

帰って早々弟をパシる姉に不満を抱きながらも言うことを聞く海斗は、公園で一人の少女に出会う。

その純粋な眼差しに海斗は……！？

雨と飴

「まったく。自分で行けっつの」

誰にも聞かれることの無いであろう悪態について、柳楽海斗は雨の中歩を進めていた。

「何もこんな雨の日に帰って来なくていいのによ……」

今朝親に叩き起こされ一階に降りると、そこには姉がいたのである。姉は東京で働きたいと言って出ていったきり消息不明だった。

まあ困ったら連絡するように言っているから、どこかでうまくやっているだろうと特に心配はしていなかったのだが、その姉が突然帰ってきたのだ。

しかもある一人の男を連れて。

言うまでもないが、その男と姉は俺の両親に例の挨拶をしに来たのだった。

元々破天荒な性格の姉である。

今まで何度となく奇抜な行動をとってきていたのだが、今回ばかりは流石に両親も啞然としていた。

「お父さん、お母さん、話があるの」

そう言って姉は静かに話を切り出した。

その後は案外スムーズに行ったもので、両親も驚きはしたものの、相手の男が人が良さそうだったから結構乗り気だった。

一通り話が終わって、ひとまず姉は我が家に滞在することになった。

「海斗。確かまだ海斗の部屋にお姉ちゃんのベッドがあったわよね。」

お姉ちゃんが泊まる間、貸してあげなさい」

母にそう言われ、嫌々ながらも姉を俺の部屋に泊めることになった。そして姉を俺の部屋に案内した途端、姉は唐突にこう切り出したのである。

「ねえ。ちょっと飴買ってきて」

「……は？」

「は？ じゃなくて。飴舐めたいの」

いきなり何を言い出すんだか。

俺が怪訝な顔で突っ立っていると姉は「これ」と言って空っぽの飴缶を見せてきた。

そして缶にはでかでかと「禁煙」の二文字。

「お父さんとお母さんには内緒ね」

そう言って姉はもう説明は充分だと言わんばかりにベッドに座って携帯をいじり始めた。

「自分で行けよ……」

こうなったらもう聞き入られることがないと分かってはいたが、少し癪だったので小さく講義してから俺は部屋を出ていった。

そして今現在。

俺は片手にコンビニの袋を持って、雨の中帰路についていた。我ながら素晴らしいパシリ精神だと思う。

まあ大概弟というものは姉にこき使われるものらしいから、仕方ないのかもしれないが幼いころから姉には敵わなかったので俺はよくこうして上手く使われていた。

その頃の名残なのか姉に言われてすぐ行動出来たのが少し悲しかった。

「腹減ったな……」

もう昼になるらしい。

辺りからは美味しそうな匂いが漂ってくる。

「……まあ食べても怒らないだろ」

俺は片手に持つコンビニの袋に手を突っ込み、先程購入した飴の袋を開けた。

中から一粒の飴を取り出す。

小分けの袋を開けて、さっさと飴を口に放り込んだ。

うん。結構美味い。

『いちごみるく味』

袋にはそう書いてあった。

今更ながら男一人がいちごみるく味の飴を買ったということに恥ずかしさを覚え、足を速めた。

早く帰ろう。

元々今日はゆっくりする積もりだったんだ。

そうして近所の公園に差し掛かったとき、あるものが目についた。傘。

今時は珍しい無地の真っ赤な傘。

それが公園のど真ん中にあったのだ。

誰かがこんな雨の中一人で立っているようだった。

自分でもよく分からなかったが何故か俺はその傘を目指して歩いていった。

ん？

少し近くなったところで気付いたのだが、思ったより傘の持ち主は小さいようだ。

子供か？

そんなことを考えているうちにとうとう目の前まで来てしまった。またしても何でこんな行動に出たのか分からなかったが、俺はその傘に話しかけた。

「おい」

案の定傘が動いて、下から一人の少女の顔が覗いた。

不思議そうにこちらを見つめてくる。

「あー……」

やばい。何言おう。

「えっと………飴食うか？」

そう言って飴を一粒取り出してみた。

「……………」

少女は無言でこちらを見つめ続けている。
まずい。これは完全に不審者だ。

「あー……、悪い。何でもない」

ここは悲鳴を上げられる前に退散しよう。
そう思って歩き出したその時。

「ちょうだい」

少女の幼い声がした。

「は？」

振り向くと少女が小さな手を差し出している。

「あめ、ちょうだい」

「……………」

一瞬脳裏に姉の顔が浮かんだが、

「ありがとう、おにいちゃん」

今は目の前の眼差しに対抗するので精一杯だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2607i/>

あめで5のお題

2010年10月28日04時46分発行